
剣の王子と亡国の傀儡姫

kujiraking

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の王子と亡國の傀儡姫

【Zコード】

Z9965Z

【作者名】

kuji raking

【あらすじ】

家族の裏切りに遭い、祖国を後にした王子。臣下の裏切りに遭い、祖国を追われた王女。

2人の運命が交わる時、歴史は動き出す！

そんな感じの物語を目指したいと思います。
なにぶん初心者なもので、拙文ですがご容赦ください。

「退却！ 退却一つ！」

指揮官の叫び声が戦場に放たれる。

しかし、次の瞬間、彼の首は鮮血の糸を引きながら戦場を舞う。全てはもう遅かった。

エウステイア王国とガズール帝国の国境線近くで始まった戦闘。エウステイア王国の内政の乱れにつけこんで侵略を始めてきたガズール帝国に対し、王国軍は当初こそ優勢だったが、時を追うごとにその戦線は後退。

今ではエウステイア南部に広がる、ミドレグリア平原にまで押されていた。

王国は正規兵の消耗を恐れ、学生隊を投入する。

この時のために召集されていた王立軍事学校の学生兵たちであった。しかし、練度の高い帝国兵に、予備軍人扱いの学生たちが敵うはずもなく、王国は敗北に敗北を重ねることになる。

救出 そしてはじまり

ひどい戦場だつた。

王国兵1000に対して帝国兵500。数字だけで判断するならば、普通に考えて負けるはずはなかつた。しかし、今や戦場で立つてゐるのはそのほとんどが帝国兵だらう。王国兵たちはもはや命惜しさに逃げ去つて行くが、ここを死地として必死の抵抗を試みるかのどちらかしかなかつた。

カイルは王国兵としてこの戦場にいた。

彼の、高貴さを思わせるような整つた顔にはすでに赤黒い返り血がべつとりと付いており、両手に構えた剣を振りぬく度に、その赤はいつそう濃くなつてゆく。

「なつ、なんだコイツッ！」

彼に対峙する帝国兵たちは、彼の姿に本能で恐怖を抱いていた。

そして彼らの身体の怯んだ隙をカイルは見逃さない。

右手のひと薙ぎで一人の首を飛ばし、続く左手の刃でもう一人の腹を切り裂く。

もはや近づく者を切り捨てるだけのカイルの通る道筋には、帝国兵の死体が列を成すように倒れている。

しかし、彼一人がいくら敵兵を倒したところで、王国軍の敗北は確実。

普通ならばこの場は退却するところだが、カイルにはやらなければならぬことがあつた。

「レーミア！ ロドリス！ どこだ、どこにいるー！」

カイルは大声を張り上げて友の名を呼ぶ。

彼らを助けないことには、カイルはこの戦場を離れるわけにはいかなかつた。

叫びながらも敵兵を切り倒しつつ、しばらく進むと王国兵らしき集団が見えてきた。

帝国兵に囲まれながらも、10人程が固まつて、敵を牽制しながら退却を試みている。

しかし、彼らが全滅するのはもう時間の問題だろう。あの中に友人たちがいるとは限らない。しかし、見捨てていけるほどカイルは冷酷ではなかつた。

カイルは敵兵の間を縫うように走つたが、彼が近づくまでに、ひとり、また一人と、帝国兵の剣によつて打ち倒されていく。

「カイルっ！！」

剣の打ち合わせられる金属音や男たちの野太い声の響く戦場に、するがるような少女の声が響く。

聞き覚えのある声に名前を呼ばれたカイルは、目を凝らし、集団の中に声の主の姿を探す。

「レーミア！ そこにいるのかっ！」

カイルがやつと王国兵集団の元にたどり着いた頃には、すでに3人にまで数が減つていた。

その内の一人はレーミア。カイルが探していた人物で、先ほどの声の主であつた。

「レーミア、無事かつ」

残つていたのはレーミア、そしてこちらもカイルの友人のロドリス、そしてもう一人は見たことはあるような気がするが名前を知らない少女。

「カイル、無事だつたんですね」

涙目で返事を詰ませたレーミアに代わり、友の生存を喜ぶロドリスの声に、カイルは頷きだけを返す。

3人とも見たところ、多少の傷を負つてはいるが、行動に支障のあら者はいないようだつた。

「ここはもうだめだ、退くぞ

近づく敵兵の剣を身を翻して躰かわし、左右の剣で切り捨てながら、カイルは背後の森に向けて駆け出した。

群がる帝国兵の中を、カイルを先頭にした4人が突つ切つていく。

幸い、そこまで遠い距離ではなかつたので、カイルは後ろを気にしながらも、すぐに辿り着くことが出来た。

（帝国兵は人數が多い。森にさえ逃げ込めば、追撃は無いだろう）
そう考へての咄嗟の行動だつたがカイルの考へは見事に当たつて、森に入りこんでしばらく行くと

敵兵が追いかけてくる気配はなくなつた。

念には念を入れてそれからもうしばらく歩き続けて、空が暗くなつてきた頃、カイルたちは座り込み、身体を休めることにした。

「カイル、よく無事でしたね」

「休みして、全員の呼吸が落ち着いてきた頃、ロドリスがカイルへと話しかけた。

「ああ、お前らこそ。生きていてくれてよかつたよ」

カイルは頬に付いた血をぬぐいながら自分の正直な気持ちを伝えた。正直、この程度のことでカイルは自分の死の予感すら感じることはなかつたが、もし彼らが生きていなかつたら自分が遠路はるばる、このエウステイア王国まで来た意味がなくなつてしまつ。

「でもみんな、死んじやつたね」

レーミアが暗く沈んだ表情を浮かべる。その言葉に、カイルを除く3人の表情も、一斉に悲しみを湛えたものになる。

あの場所で、帝国兵と刃を交えたカイルたち王国兵は、学生から成る部隊であつた。

王立軍事学校。

エウステイア王国が大陸に誇る、軍人の養成学校だ。

毎年多くの士官候補生を輩出しており、有事の際には実働部隊も派遣する、王国軍直轄の教育機関である。

カイルたちはこここの5年生であり、戦場には5、6年生の混合部隊が送り出されていた。

「あの、ちょっとといいかな」

今まで、カイルは自分に話しかけてきた彼女　　名前を知らない少女の存在を忘れていた。

カイルは視線だけを彼女に向けて言葉の続きを待つ。長い黒髪に、しなやかな体躯を持つその少女は、カイルの視線につゝ、と詰まりながらもすぐに先を続ける。

「助けてもらったことに感謝する。私はエリ・シノサキ。6年生だ」「知つてますよー。シノサキ先輩。6年生の剣術成績の主席。将軍席に最も近い人つて噂の人です」

ロドリスは「会えて嬉しいです！」と言いながら彼女に握手を求めている。

「へえ。そんなにすごいのか」

カイルは驚いてみせるが実際は全く驚いてはいなかつた。軍事学校の卒業生で在学6年間を通しての成績上位者は、若いうちから軍の上層部に迎えられることもある。

座学や剣術の成績を総合的に判断し、かつ人間的にも優れていると認められれば、国内に12人しかいない将軍職にでも選ばれる可能性はある（しかし実際、卒業後すぐに将軍になつた者はいない）。しかし、カイルにはそんな外野からの評価は興味の内に入らなかつた。

実を言うと、先ほどの撤退時、カイルはこの少女を試していた。

撤退において、最も危険なのは後ろを守る「殿」であるが、包囲されていていたときの彼女の鮮やかな剣裁きを見ていたカイルは彼女をそこに置くことで、力を計ることにした。

レーミアやロドリスは同じ学年だから力の程を把握してはいるが、彼女ことを知らないカイルは、一緒に行動することになるであろうこの少女の力量を確かめておく必要があつた。

カイルが後ろを必要以上に気にしていたのはそのためであつたが、果たして、この少女はカイルの期待以上のはたらきを見せてくれたのであって、自分の中では彼女への評価はすでに決まつたものだつたのである。

「いや、私なんてまだまだ修行の身だよ。それよりキリ……」「カイルです」

「カイル君か。カイル君は強いな。先ほどの剣捌き、実に美しいものだったよ」

「……」

カイルとしてはわずかとはいえ、自分の実力を見せるのは躊躇われた。

しかし、カイルがエウステイア王国へ来た理由。

その理由のためにはレー・ミア達を死なせるわけにはいかなかつたのだ。

カイルは5年前、この国に来た頃のことを思い出す。

回想 ハウステイア王城にて

「レストニア王国第一王子、カイル・フェリル・レストニアであります」

玉座の間と呼ばれる場所で、カイルと名乗った少年は目の前に座るこの国の女王、メクフィリア・ルフェス・ハウステイアに向かい、片膝を地につけ、頭を垂れている。

「顔をあげてください、カイル王子。そんなに畏まらなくてもよいのですよ」

「はっ」

カイルは床に向けていた顔をあげる。

メクフィリア女王は、とても美しい女性ひとだった。

線の細く、透き通るような肌をした身体はしかし、妖艶さも漂わせて、豊かな胸元を惜しげもなく晒した大胆な衣装が彼女の清らかさを一層のものとしているようである。

並の男性ならば、その姿に劣情を抱いてもおかしくないほどであるが、カイルはまだ12歳。

女慣れなど当然まだしていないのであって、ただただ羞恥ずかしいだけであった。

「この度は、私の勝手な願いを聞き入れてくださいて、ありがとうございます」

カイルは、美しき女王から視線をはずしながら、必死で覚えてきたセリフを詰つ。

目上の人に対する畏まつた言葉遣いはカイルにとって数少ない、苦手な分野だった。

今回、カイルはレストニア王国を出て、ここハウステイア王国にある王立軍事学校へ通うことになつて、初めて他国の王族と直接会話するために、一夜漬けで何通りものセリフを覚えてきたのだ。

「いえいえ。あなたのお母上とわたくしは文を交し合つほど仲で

すもの。彼女の愛する息子のことであれば協力は惜しみませんわ」
カイルの母、レストニア王妃は元々エウステイア出身の平民だったらしい。たまたまこの地を訪れた父、レストニア国王がたまたま母を見つけ、人目惚れして連れ帰つて王妃にしたのだそうだ。

昔からレストニアは出身や身分などの違いにこだわる国ではなく、色々な国から優秀な人材を受け入れ、発展してきた国だ。

レストニアという国も元々は移民の建国した国であり、その当時の彼らは大陸各地から集まつていたという。

だから、レストニアの民も王の結婚には反対する者などいなかつた（さすがに上層部の貴族たちは王族に平民を迎えるなんて、と言つていたらしい）。

それから一言二言交わした後、女王との謁見は終わり、カイルは食事の席に招かれた。

女王やその夫、一人娘であるアイリス王女の居並ぶ席に座るのはとても度胸のいることだつたが、カイルはもうどうにでもなれという気持ちで、この誘いを受けた。

しかし、カイルの緊張は杞憂だったようで、カイルはまるで彼女らの本当の息子のように、打ち砕けた態度で接してくれた。
そして、その食事の席も終わり、もう部屋に戻ろうかというとき、カイルは女王に呼び止められた。

「なんでしょうか、メクフイリアさま」

カイルも、もうずいぶん彼女との会話には慣れてきた。
変に気を使わないでいいのはありがたかった。

故に彼はこの女王との会話を楽しいものだと思いかけていた。
しかし、

「あなたの真の目的は聞きました

続く彼女の言葉にカイルは戦慄を覚えた。さすがの人生経験の違いか、それとも彼女はカイルの瞳の奥に何かを見たのだろうか。

「ですがどうか、くれぐれも無理をしないで。何かあれば必ず力を貸すから

カイルは僅かに顎を縦に引いてから、彼女に背を向けて歩き出した。

そう、メクフィリアの察した通り、カイルには目的があった。表向きは見識を広めるため、と言っているが、本当はそうではなかった。

彼は自分が生き残るために、自分の助けとなる信頼できる人物を探しにきたのだ。

王立軍事学園に入れば、自分を支えてくれるほどの、強い者、信頼のおける者と出会える確立は高いだろうから。

彼は、レストニアで自分の母が自分の兄に殺されるところを見てしまった。

身内と言えども、もう誰も信頼できない……。

「カイル君、カイル君。大丈夫か？」

「あっ、ああ。すまん、何でもない」

昔を思い出しているうちに、ぼうっとしてしまったのか、エリ・シノサキが心配そうにこちらを覗き込んでいる。

「大丈夫。それより、何の話でしたつけ？」

「キミの剣技の話だよ。あれは我流かい？」

「ええ、まあ。剣術は兄に教わりましたが、二刀使いは完全に我流です」

カイルはその戦闘スタイルを最大限に活かすため、二刀流を好んでいる。

敵の刃とは、よほどのことがない限り切り結ばず、全て避ける。カイルの並外れた身体能力があればこそその荒業ではあるが、これにあわせて二刀を使うことによって、極限まで手数を増やすことが出来るのだ。

「東方にも二刀流というものはあつたが、長剣一本といつのはあまり聞かないなあ」

「そうでしょうね。慣れていなければやりにくいけだけですよ」

「シノサキ先輩は東方の出身なんですか？」

カイルとエリの会話に「わたしレーミアつていいます！」と言いながらレーミアが入ってきた。

「あっ、ああ。そうなんだ。あと私のことはエリで構わないよ」

若干うるたえた声で返答するエリ・シノサキ。

カイルは彼女の特徴的な名前で気付いていたが、レーミアはわかっていないなかつたらしい。

そして彼女のこの慌て様。何か事情がありそうだな。

「私はヤマトの国の出身だ。まあそんな国はもう存在しないがね」

ヤマトの国とは、10年ほど前エウステイア王国に併合された小国

であった。

かの国のフジという山でかつて採れていた特殊な鉱石は、鉄をも切り裂く武器を造り出せたという。

「そうですか。あつ、そんなことよりお腹すきません？ 今日はもう暗いですし、どうせここで野宿になりそうですし」

「そうだね。僕は近くに水場が無いか探してくるよ」

レーミアとロドリスがまたも暗くなりかけた雰囲気を、無理矢理元に戻す。

この2人がいてくれると、ほんとにぎやかになるなあ、とカイルは思った。

すると、立ち上がったロドリスがカイルの方へと歩いてきた。

「カイル、あれを使つても大丈夫かな？」

「ああ、いいんじやないか」

ロドリスは植物の声を聞き取ることができる特殊な能力を持つている。

学校の寮で同室だったカイルは、この秘密を打ち明けられた時、誰にも言わないほうがいい、と忠告しておいたのだった。

そんな能力を持つと明らかになれば、卒業を待たずして、ロドリスは軍に道具同然に扱われることになるだろう。

それに、カイルには、卒業後も彼を軍には渡さず、自分の側へと引き込むつもりであった。

ロドリスは頷いて森の方へ歩いていく。

カイルは気をつけろよー、とだけ言つて、エリ・シノサキに向きなある。

「それで、先輩。これからの方針なんですが……」

「エリ、と呼んでくれと言つたろう。で、どうする？」

「……はい。俺たちが戦つっていたミドレグリア平原はもう敵の占領下でしそう。幸い村などはもう少し奥、タウラク付近まで入り込みないと無いでしそうし、夜になれば敵はそこに陣を張ると思います」

「ああ、そうだろうな」

カイルは地面に、指で地図を書きながら説明をする。

「俺たちがいるのは」「」「ミドレグリア大森林です。平原を通らずにハウスティアへと戻るのは山地を越えなければダメです。俺は一旦、ラプタ商国に抜けてから、エウスティアへと戻るのがいいと思います」

ミドレグリア平原からその北にある大森林へと指で線を引き、さらにはその北西にあるラプタ商国を示す。

「ふむ、しかし少し遠くはないか？」

「」「の戦力で5000の帝国兵の中は突っ切れませんよ。それよりもラプタとの間には街道が繋がっていますから」

「それもそうか。ではいつ出発する？ 暗いうちに行ける所まで行つたほうがいいのではないか？」

「いえ、森の中ですしそここまで警戒する必要もないでしょう。レーミアたちも疲れているでしょうし出発は夜が明けてからでもいいかと」

「わかった。ではその線で」「」

「はい」

カイルは了解の意を示した後、今の今までなかなか言い出せなかつたことを切り出す。

「さつきから年上に向かつて失礼な言葉遣いですいません。それに本当だつたら先輩の指示なりを聞くべきところなのに」

しかしそんなカイルの心配をエリは一笑に付した。

「いやいや、優れた意見を聞き入れるのは当然だよ。ましてやキミは私よりも頭が回る方みたいだからね」

「はあ、ありがとうございます」

それからカイルは、水を持つて戻ってきたロドリスや、糧食の配分をするレーミアにも夜が明けてからの予定進路を伝えた。

そして王国軍から支給されていた携行食の干しパンと、力チカチの干し肉を食べた後、念のため周囲の気配に気を研ぎ澄ませながら、浅い眠りに落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9965z/>

剣の王子と亡国の傀儡姫

2011年12月30日22時54分発行